

玉妻

大原富枝



正妻

大原 富枝

せい さい
正 妻



昭和36年 5 月25日 第1刷發行

¥ 290

著 者 おお はら とみ え
大 原 富 枝
發 行 者 野 間 省 一
印 刷 所 豐國印刷株式會社
(藤澤製本)

發 行 所 東京都文京區 株式會社 講 談 社
音羽町 3 19

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

© Tomie Ohara 1961

正

妻

装
幀
川
田
幹

第一章

廣間の酒宴はまだ盛りであつたが、上席の老人たちはぼつぼつ歸りはじめていた。中座して親戚の老人を式臺に送りだしていつた市が、廊下を引返してくると、夫のご同列、上席家老の深尾主水と寺村主膳の二人が、夫に送られて歸つてゆくところであつた。

——おや、もうお歸り遊ばしますか、どうぞいまい少し、ごゆるりとお過しなさいませ。

脇に寄つて身を避けながら市はいつた。

——いやもう、十分に頂戴しました。年寄が長坐しては若い者が寛ろげまい、野中ど
のご慰勞は奥方の存分にお委せして、われらはこれで退散しましょうぞ……

主水は後の良繼を振返つて笑つた。市の叔母の夫にあたる主膳も人のいい笑い聲をあ
げた。笑い方にも何か意味ありげな主水とは、對照的なとり合せであつた。

——それはそれは、至りませぬばかりで失禮申しあげました。

市も笑つて二人の客と夫を先に立て、自分もその後から見送つていつた。客の供廻り
のとのうあいだ、市は式臺に坐つていたが、夫の袴の裾の折れ返つているのを見て、
そつと直した。

——小倉のご老人はどこじや、見えぬようじやが……

廣間に引返しながら良繼が市を振返つていつた。

——お祖母^{ばば}さまのところだと存じます。

良繼は肯いただけで、祖母の慈仙院の住んでいる東の棟への渡り廊下を歩いていつ
た。

市は後に従つてゐる女中たちを廣間へ返しておいて、姑の萬女のある離室の飛び石を

傳つていつた。

中庭にある沈丁花の古い株が花を開いたと見え、夜氣に強く匂つていた。

——只今、深尾さまと寺村の叔父さまがお連れだつて、ご機嫌よくお歸り遊ばしました。

酒席には出ようとしなかつた姑に、市はそう報告した。

——御首尾がよろしゆうて、何よりお目出度い。さぞお疲れであらう、大勢のお客人で……

——廣間の方はもう氣の置けないお客人ばかりでございます。小倉さまのおじさまはお祖母さまへ呼び立てられてお越しでございますから……

——お祖母さまは小倉さまがお氣に入りますからもう、お酒をすすめておいでだらう！

萬女は含み笑いをしていた。

氣持の照り陰りの非常に少ない、いつも平靜で控え目な人であつた。

今夜は、息子の良繼が難工事といわれた山田堰の工事を竣工した祝宴であつたが、萬

女は廣間の賑わいの席にはでようとしなかつた。しかし、市には今夜の姑が珍らしいほど機嫌がよく、満足なのだ、と思われた。

立腹した顔など、ついぞ見せたことのない、このいつもにこやかな人を、市はこの人にはじめて逢つた昔の子供の日から、なんとはなしに怖れていた。

女としては額の少し廣すぎる、頬骨の高い、決して美しい人ではなかつたが、それだけに笑顔はあたたかく親しみ易いはずの顔たちであつたのに、萬女の笑顔にはなにか却つて人を冷たく射るような鋭どさがあつた。

市はこの、何も彼も見通しのようにすみずみまでよく氣のつく姑の前にと、早くこの人の前を去るための、一番自然なきつけかけを掴むことにばかり心が集中してゆくのを、いつも情けないことに思つた。

そのために却つて次々と話題を探して、姑の前に居残ろうとしてしまうことになる。

——お祖母さまは、今夜は大層ご満足のようで廣間のご酒宴にも暫らく御同座なさいました。お部屋へお引きとり遊ばしてから、別にお酒もりをはじめておいででございます。

市はそういつて少し聲に出して笑つた。その笑いには祖母の慈仙院が、女だてらになまかな男はかなわないほどの酒豪だという、親しいものの間だけに通じあう^{ひんしゆく}響盞の氣持がこめられていた。

野中家の奥向きで一番勢力を張っている祖母を、内々でこんなふうにあう無禮を敢えて共謀してやりましよう、というふうな市の笑いの中には、自分の中にある姑への畏怖を打ち破ろうという無意識な努力があつた。

——それはもう、お祖母さまとしてはご満足の上にもご満足でございましょう、何とゆうても今度の山田堰は、先年の吉野川の開拓とは異うて大變に大がかりな仕事で、堰が成功するかどうかは、この仕事ができるかならぬかの第一の足がかりです、これが成功すれば、良繼の政治の仕事もようやくその緒がつこうというもの……

萬女は若い市のそういう自分への屈折した氣持は勿論、祖母へのいたずらっぽい陰口にも氣づかないように、巧みに避けて良繼の仕事という話の筋から反れようとはしなかつた。

努力してではなく、それより他のことは姑には考えられないのだ、と市は察してい

た。

——お祖母さまは、良繼どのご自慢ばかり遊ばして、小倉さまがそれをお認めなさるのを、何度もおききになりたいのでございます。

市はやはり、自分は一步その渦中から退いている人間のように、いつた。微かに皮肉なものが加わっていたが、萬女はそのことも感じないように、あるいは氣づかないふりで笑っていた。

——小倉さまがご迷惑遊ばしておいででございましょうよ、ご酒を召しあがつたときのお祖母さまの執つこさは、また格別でございますから……

市はしかし心の中では、さつき歸つてゆく深尾主水が、——野中どのご慰勞は奥方の存分にお委せして、と笑つたことを思いだしていた。その笑いに翳があつたか、どうかを考えていた。

主水はかなり酒に酔つてはいたけれど、それは酒の上で、若い夫婦をからかう戯れごとであつたのか、それとも酒にまぎらせて自分たち夫婦の祕密を知つていることをほめかせたのか、市にはどつちとも判断がつかかなかつた。

主水の言葉に市がこんなふうにくだわっているのは、姑の萬女が、その自分たち夫婦の祕密を知っているか、どうか、を考えているからであつた。

大勢の召使いのいる野中家のような、家老職でそして執政という家柄のありようでは、主人夫妻のあいだ柄を、絶対に祕密に保つてゆくことは殆ど不可能であつた。

まだ新婚六年目の夫婦であるにもかかわらず、市と良繼とがもう三年前から兄妹のような間柄になつてしまつてゐるという祕密を、召使いたちの中で知らないものは殆どないだらうと市は考えている。

そういう事情が一方ではまた、召使いのすべてが知つてゐるにちがいない祕密が、この邸の奥向きを支配している祖母の慈仙院にだけは、絶対に祕密にされている、という不思議な事實をも生んでゐるのであつた。

どんなに口さがない召使いたちにしても、口が裂けても洩らさない、という緊密な提携によつてそれは保たれてゐるのであらう。もし洩らして慈仙院の耳にはいつたとしたら、まづ先に自分たち自身の身の破滅を招くのだ、とわかつてゐるからである。

野中家の奥向きは、姑の萬女の起居している離室の茶室づくりの一棟と、慈仙院がお

きたや、おちや、こなどというお氣に入りの酒豪の召使いどもと隠居して氣ままに暮している別棟と、そして市夫婦と未亡人になつて玄林院と稱ばれている市の母たちの棲んでいる廣い母屋と、大體三つに分れていた。

祖母の慈仙院はもう九十歳に近い老女であつたが、まだ毎日相當の酒を缺かさず、多分に氣分的な、變化の烈しいやり方で、この邸の奥向きを支配しようとしていた。彼女の機嫌の好し悪しは忽ちこの邸の奥向きを左右する。

市の母は、東の棟にいる慈仙院のご機嫌の悪い日は、——今日は、東風が大分きついで、ようでございます、と娘の市にだけは笑つていう。

若いところからこの氣性の烈しい酒豪の姑に仕えてきた彼女は、長い間の忍従と訓練とで、いつのまにか姑の氣分的な變化の烈しい陰で、邸の空氣をいつも一定の平常さに維持してゆく術を體得していた。

召使いたちの身の立ちゆくように氣を配りながら、表面はどこまでも慈仙院の意志通りに動いていると見せて納得させてゆく、氣苦勞の多い運営に馴れていた。溫和な氣質で、控え目なところに却つて自分を活かす術に長じている母は、召使いたちをも上手く

掌握していた。

萬女は一見、そういう野中家の空氣の外にいるように見える。彼女は自分の身分を忘れることがないように、決してこの邸の奥向きに口だしすることはなく、求められなければ自分の意見を表明することもなかつた。

けれども萬女がそこにいるということは、野中家の女中たちの端にいたるまでいつも意識の中においていた。そうさせる、人としての重量が、力が萬女には備わっていた。

息子と市との結婚生活の祕密を知つたとしても、萬女なら知らないふりで、ひとこともそれに觸れようとはしないであろう、と市には信じられた。

それは、母の玄林院が何かにつけて見せる悲嘆と、全く對照的なものだった。そういうところに市はこの姑の怖ろしさを見ていた。逆にまた、自分への情愛も、いたわりも感じていた。

市は夫の良繼が、この母とともに、突然自分の前に現れた子供の日のことをいまもよ

く憶えている。

彼女はそこ七つの少女であつた。野中家では男の子が夭折し、長女はもう他家に嫁入りしていたので、市は野中家を嗣ぐ娘であつた。

——さあ、お前にも立派な兄様ができるのじゃ。

とそこはまだ若くて一層元氣であつた祖母が全く上機嫌であつたので、市は美しい着物をきせられ、ひどくはしやいでいた。

廣間に親戚の人々や小倉家の家族なども招待されて居並ぶ中に、良繼母子が案内されてはいつてきた。良繼は十三歳ときかされていたけれど十五六歳にも見える大柄な少年であつた。固く氣構えたものを身内に漂えた少年は、小倉少助に導かれて、自分は決して臆してはいないのだ、というように眉をあげて床前にいる主人の直繼をじつと凝視していた。

萬女はそのあとから、息子を守るように靜かにはいつてきた。嚴肅な表情の中に、にこやかなものを含んでいた。しかし、市はその人を見たとき、何か異様に打たれた。彼女は怖い、と怯えたのであつた。怯えながら、良繼とその母から眼が逸らせないで凝視

めていた。

養子縁組みを固める杯ごとが、賑やかな少助のとりもちによつて行われ、市も二度ほど一人前に杯を受けさせられ、母に手を添えられてそれを嘗めさせられた。

そのあとで市は座敷を抜けだし、親戚の子供たちと池の周りを駆けて遊んでいたが、ときどき座敷を覗きにいった。座敷には酒宴がはじまつていて、開け放した縁側から赫い顔をした大人たちが、めでたいめでたい、といつていた。

市は正座に大人と同じように袴の膝を崩さずに正座している良繼とその母をちらッと怖そうに見てから、

「小倉さまの兄さまア、遊びましようよ——」

と下座の方にいる小倉家の息子の三省を小さい聲で呼んだ。

すると、三省は驚いてこつちを向き、ぱつと赧らめた顔を狼狽して振つた。良繼よりも年はずつと上なのに筋骨の細い三省は、座が亂れてきても尙緊張を解かないで威儀を正している良繼少年と比べると、四つ五つしか違わないように見えた。

女中が追つてきて市は庭の方へ連れ去られたが、連れ去られながら、顔を赧くして窺

うように良繼母子の方をもう一度ちらッと見た。

自分に呼ばれたとき三省がばつと顔を赧らめ、たしなめるように狼狽して——頭を振つて見せたことと、周りの人々がいつせいにこつちを見た、咎めるような眼つきとで、市は自分が、してはいけない行儀の悪いことをしたのだ、ということがわかつていた。

初対面の良繼母子の前で、大勢の客の前で、こういう恥をかけたことが、小さい彼女の自尊心を強く傷つけていた。三省を呼びだしにいつたのは、溫和な彼に遊び友達になつて欲しいというよりも、やはり廣間の良繼母子のことが氣になつてならなかつたからであつた。覗きにゆきたかつたからであつた。

このときから良繼母子は野中家の家族になつたが、市は彼等になかなか親しまなかつた。

良繼は禪學の勉強と劍道の修業のためにきびしい毎日を過して、市と遊ぶことなどは殆どなかつた。彼は市をまるで見ていないように無視していた。肩を怒らし眉をあげて、いつも虚空の彼方を凝視めるように歩いていた。

萬女は誰にもにこやかで、市には殊にやさしく振舞つた。それでも市が彼女に親しも